

やまと 民俗への招待

8月24日夕、広陵町三吉の大垣内地区の立山行事を見学した。立山は民家の一室などを借りて、思い思いのテーマで人形などを展示するもので、集落の地蔵堂（専光寺）を中心あちこち巡り歩けるように設定されている。今年は「オバマ大統領広島訪問」、「眞田丸」「あさが来た」、「イチロー」、「パンマン」、「獅子舞」の6テーマだった。

第二次世界大戦前は、10人ほどの有志の男が青年団に手伝わせて行っていたが、戦後

は青年団が続けてきた。その後下火となつたため、7年前、当時自治会長だった出井裕久さんが呼びかけて「大垣内立山保存会」を結成した。現在は男女60人足らずが6班に分かれて受け継いでいる。

5月ごろ舞台となる民家を依頼し、6月から準備を始めるといふ。もとは家の新築や結婚などの祝い事のあつた家に頼んでいた。



6力所で披露された立山のうち旧杉原家医院の「獅子舞」。大きな獅子が機械仕掛けで動いていた。筆者提供

土地に根付く「芸術」

「眞田丸」では、運命を決する「犬伏の密談」が、玄関の間に再現されていた。照明にも工夫を凝らし、眞田家の緊迫した談義をさせる場面だった。

立山は愛宕祭りや地蔵盆などにあわせて催される庶民主体の民俗行事で、橿原市や吉野町でも行われている。

鶴見俊輔の芸術論を適用すれば、土地の人の創意工夫で作り、土地の人人が楽しむ「限界芸術」そのものだ。専門家が作り、観光客を呼び込もうと今年新規に始まつた「奈良大立山まつり」は名は似ていても本質的に異なる。

地蔵堂の解説板には、江戸期に疫病がはやり、身代わりに立山を行つたとも、土豪が武者人形を立てたのが始まりとも書かれている。しかし、だからといって、県内各地の立山行事全部が「身代わり」として立山を作っている訳ではない。

胴体を木組みで作り、衣装を着せて念入りに作り上げていく。

人形は等身大で、30体分ほどの頭や手足が地元に伝えられており、

(奈良民俗文化研究所
代表・鹿谷勲)

II 隔週掲載